

令和3年度前期
学生による授業アンケート
調査の結果

令和3年9月

志學館大学事務局学務課
志學館大学 I R室

令和3年度前期 学生による授業アンケート調査の結果

この報告は、学生授業アンケート結果の概要を示し、個々の教員が自己の担当授業のアンケート集計結果を基に自己点検・評価をするために必要な統計的情報を示すことで、授業の改善を考える上での参考にして貰うことを目的とする。また、これらの資料を分析することで、本学の教育改善に資するための情報を得ることを目的とする。

1. 調査の概要と資料

令和3年度前期の質問及び回答選択肢は、平成30年度以来のものを踏襲した前年度後期と同じで、以下のとおりであった。なお、以下では質問項目の順序を入れ替えグループ分けしてあるが、この分類はアンケート時に示されていたものではない。

【授業スキル関係】

- Q1. 授業の分量は適切であった (5. 強くそう思う～1. まったく思わない)
- Q2. 授業の進み具合は適切であった (同上)
- Q3. 教員の教え方はわかりやすかった (同上)
- Q4. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった (同上)
- Q5. 毎回の授業のねらいははっきりしていた (同上)

【アクティブラーニング関係】

- Q7. 授業には、新しい知識の獲得や発見に、学生を導くような工夫や仕組み、働きかけがあった (同上)
- Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた (同上)
- Q9. 予習、復習の課題やアドバイスは適切に与えられた (同上)
- Q14. 積極的な参加 (自ら考えながらの受講) が求められる授業だった (同上)

【教育の質保証関係】

- Q6. 授業は講義要項に沿った内容であった (同上)
- Q16. この科目の「到達目標」(シラバスに記載)に達することができたと思いますか

【学生の学習行動関係】

- Q10. この科目の予習に毎週当てた平均時間 (1. していない、2. 30分程度、3. 60分程度、4. 90分程度、5. それ以上)
- Q11. この科目の復習に毎週当てた平均時間 (同上)
- Q12. 授業時間内にこの科目を熱心に学習した (5. 強くそう思う～1. まったく思わない)
- Q13. 授業時間外にこの科目を熱心に学習した (同上)
- Q15. あなた自身の取組姿勢の総合評価 (10. 高⇔1. 低)

その他 自由記述による意見

Q14は平成30年度のQ10と同じで、Q16は30年度に新設した質問である。Q10とQ11の学習時間の「5. それ以上」は簡易的に120分として分析した。演習科目と共通教育科目のみに係る質問には無回答のものが多かったため、また、大学院課程では資料数が少なかったため、分析対象としなかったのは、30年度以降同じである。

2. 分析方法と結果

学士課程の今期の開講授業から、アンケート調査の対象となっていない授業や回答なしの授業を除き、280 (253、262、249、256) 授業で回答が得られた (括弧内は、令和2年後期、令和2年度前期、令和元 (平成31年) 年度前期及び後期の値である。以下、括弧内において同じ)。このうち回答数が10 (10、10、10、10) 以上の189 (130、186、148、160) 授業を分析対象とした。各授業の質問項目ごとの評価点は、複数の学生による回答の平均値と標準偏差で代表した。以下、この平均値の全授業にわたる平均値と標準偏差及び標準偏差の全授業にわたる平均値を求めた。

回答数が10 (10、10、10、10) 未満で分析対象としなかった授業は91 (123、76、101、96) 授業であった。回答数10以上を分析対象とした理由と、それゆえに分析結果の解釈に統計学的には一定の留保が必要である点はこれまでと同じである。

2.1 授業の内容及び方法

(1) 回答率

分析対象とした189（130、186）授業の平均回答率（全受講者数で全回答数を除いたもの）は0.58（0.36、0.37、0.44、0.43）で、近年でもっとも高くなった。なお、アンケート対象すべてである280（253、262）授業では、回答率は0.49（0.33、0.36）であった。280授業での回答率の平均は、50.3%（SD=.25）、中央値は48%であった。回答率が8割を超えている科目が17.5%ある一方、3割を下回る授業が21.1%、2割を下回る授業が10.7%あった。一部の授業では教員から学生への周知が未だ不十分であったものとする。

(2) 個票の質問別回答平均値

授業スキル関係のQ1～Q5の質問への、授業ごとの回答の平均値の分布を図1にヒストグラムで示す。比較のために、左側に今期（令和3年度前期）、右側に令和2年度後期の結果を示す。縦軸には相対度数（割合）を取っている。

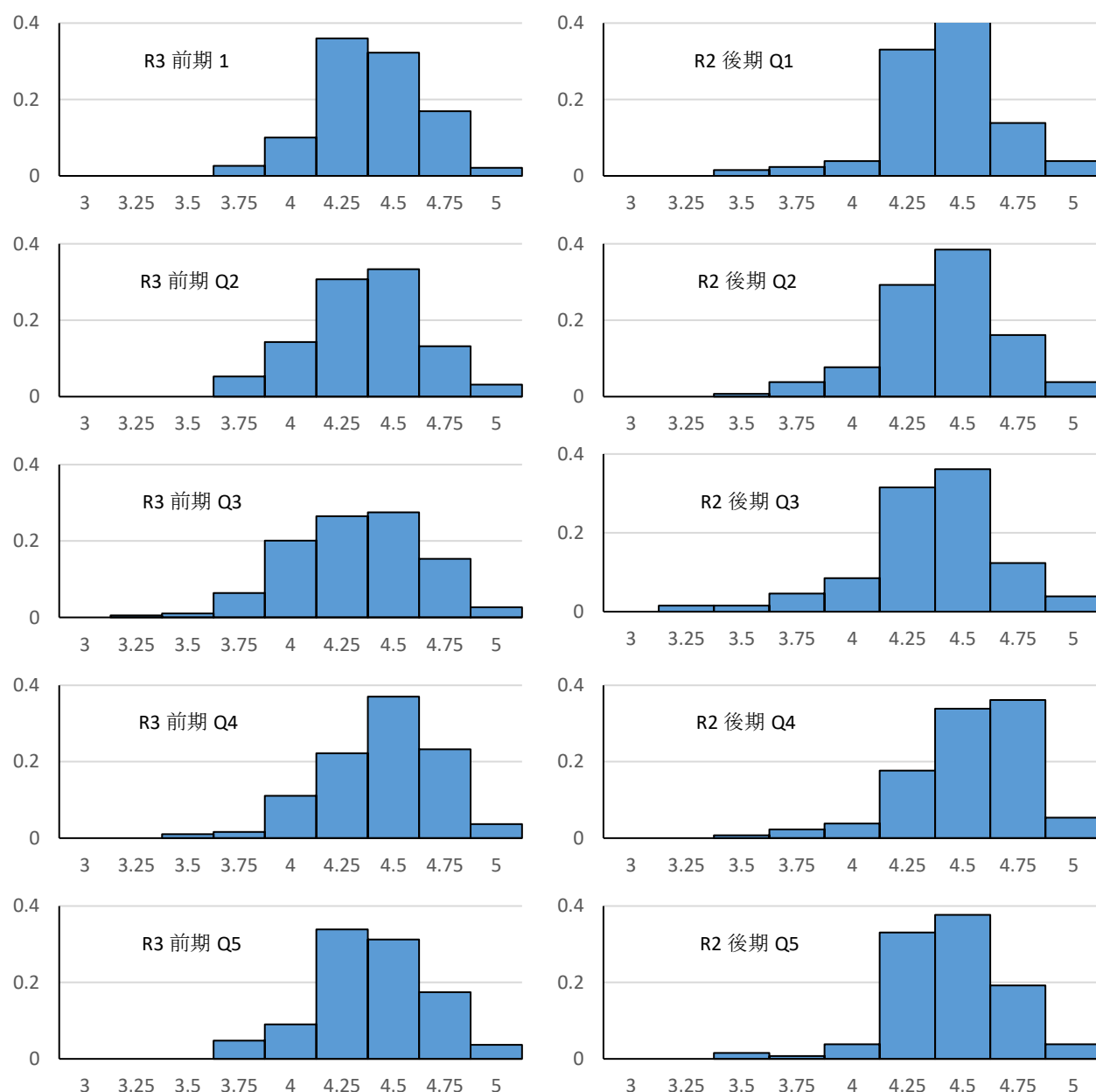


図1 質問項目ごとの回答平均値の分布（Q1～Q5）： 授業スキル関係

Q1 [授業の分量] では、昨期よりモードが一階級下がってはいるが、階級値4.75がわずかに伸びている。Q2 [授業の進み具合] はモードに変化はないが、階級値4.5の割合が減り、階級値4が増えている。Q3 [教員の教え方] はモードに変化はないが、昨期より尖度 (.002) が下がり、正規分布様となっている。Q4 [教材等] はモードが一階級下がるとともに全体的分布が左に移動している。Q5 [授業のねらいの明確さ] は、極端に低い評価が減る一方でモードが一階級下がっていた。

アクティブラーニング関係のQ7～Q9、Q14の結果を図2に示す。分布は授業スキル関係に比べて、左に裾を引く程度が小さく、より正規型に近いものであった。すべての質問で、モードは昨期と同様に4.00以上～4.25未満の階級（階級値4.25）にあった。

教育の質保証関係のQ6、Q16の結果を図3に示す。Q6、Q16ともにモードに変化はなかったが、Q6では、階級値4.25がわずかに増えている。

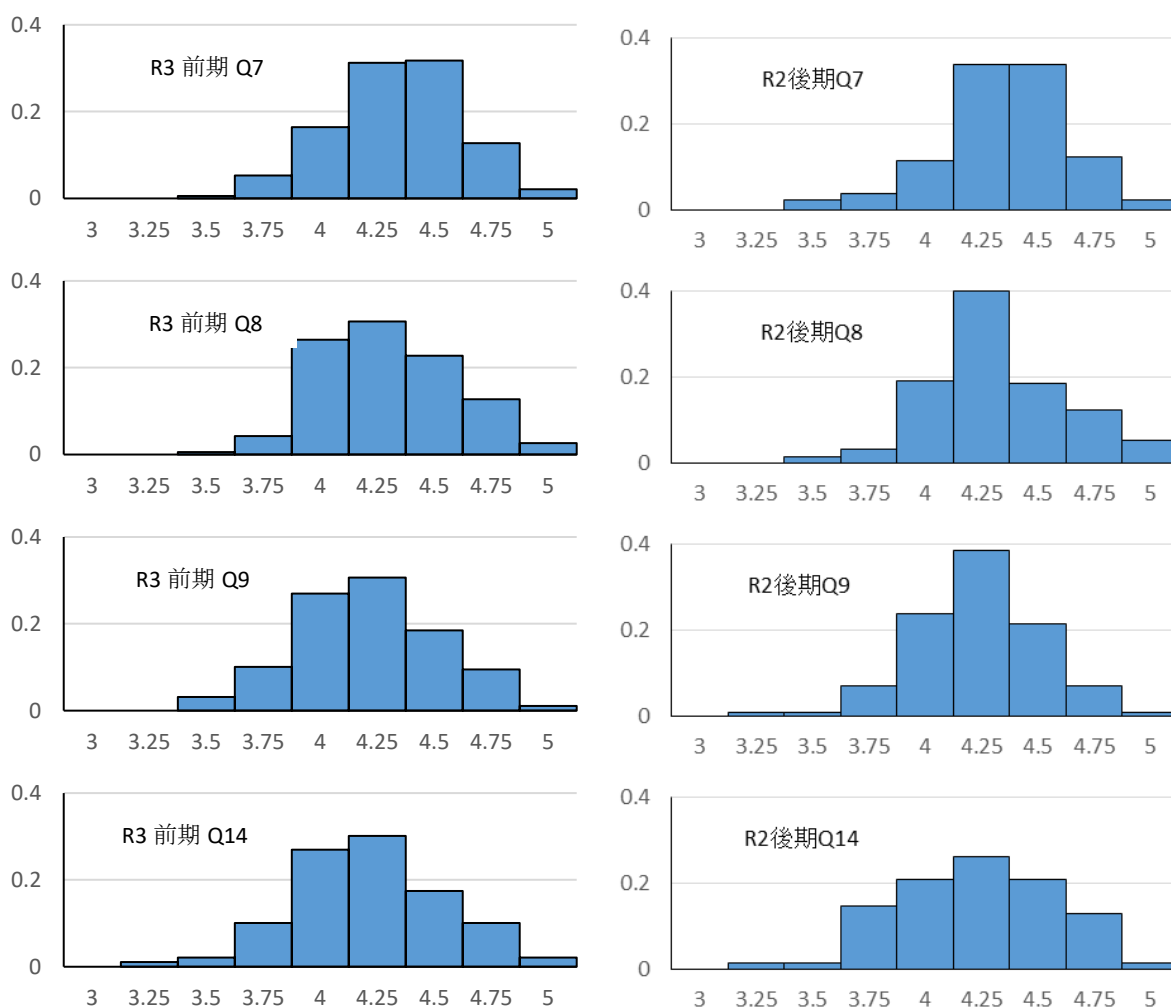


図2 質問項目ごとの回答平均値の分布 (Q7～Q9、Q14) : アクティブラーニング関係

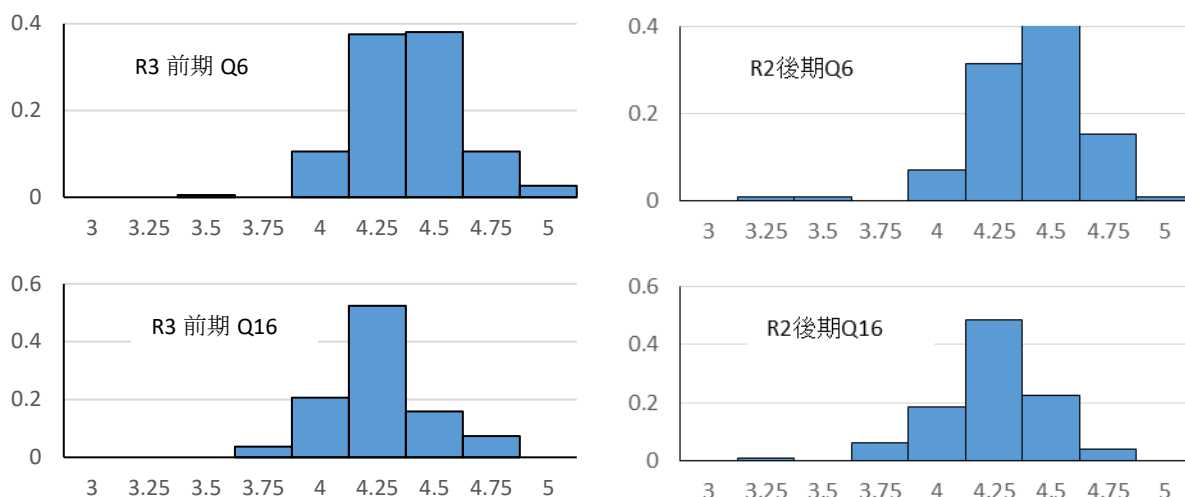


図3 質問項目ごとの回答平均値の分布(Q6、Q16)：教育の質保証関係

授業ごとのQ1～Q9、Q14及びQ16の質問への回答の評価点の平均値と標準偏差を、質問グループに分けて、表1に示す。すべての質問項目で回答評価点の平均値は4を超え、昨期に比べ、すべての項目で平均値は高く、標準偏差は小さかった。昨年度後期（令和元年後期）と比べても、Q8を除き、いずれも高かった。Q8はほぼ同等であった。

個々の授業で、上記の評価からの「外れ」が小さい（平均的である）と判断する目安として、平均値±0.5×標準偏差の値を、表1の下2段（表の上・下限値）に示す。授業科目ごとの平均値がこの範囲に入っていれば「ほぼ平均的レベルにある」と評価できる（統計学的には厳密なものではない）。授業ごとの、教員による自己点検に供されたい。

表1 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	授業スキル関係					AL 関係				質保証関係	
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q7	Q8	Q9	Q14	Q6	Q16
平均値	4.26	4.23	4.19	4.31	4.26	4.19	4.16	4.07	4.07	4.25	4.12
標準偏差	0.25	0.27	0.33	0.28	0.28	0.29	0.28	0.30	0.33	0.23	0.21
上限値	4.38	4.36	4.35	4.45	4.40	4.34	4.30	4.21	4.24	4.36	4.22
下限値	4.13	4.09	4.03	4.17	4.13	4.05	4.01	3.92	3.91	4.14	4.01

(3) 「優れている」及び「改善を要する」授業数

明らかに優れている又は改善が必要と判断する目安として、平均値±1.96×標準偏差の値を表2示す（表2の上・下限値）。また、この上・下限値の範囲を外れ、「優れている」と「改善が必要である」と評価される授業数を下2段に示す。

今期は、質問項目ごとの「優れている」が2～8授業（1～5、1～4、0～5、0～2授業）で、昨期より幾分増えている。「改善を要する」は、3～9授業（2～7、5～10、1～6、4～9授業）とこちらも増加している。

優れている」授業より「改善を要する」授業が多い傾向は、図1及び図2で見られるように、左に強く裾を引く分布を示す項目の場合、平均値から下方に大きく離れた値が多いために生じたものである。

表2 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	授業スキル関係					AL 関係				質保証関係	
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q7	Q8	Q9	Q14	Q6	Q16
上限値	4.75	4.76	4.83	4.86	4.81	4.75	4.71	4.65	4.73	4.70	4.53
下限値	3.77	3.69	3.54	3.76	3.72	3.63	3.60	3.48	3.42	3.80	3.71
優れている数	4	4	4	2	3	3	5	5	4	5	8
改善が必要な数	6	7	3	5	9	5	3	6	4	4	5

(4) 回答平均値の分布の変化に見られる改善と課題

適切に実施されたと受け止められている授業が多く、またその程度が向上していることを示唆している傾向は、平成29年度から継続している。

質問グループごとでみると、授業スキル関係に比べて、アクティブラーニング関係及び教育の質保証関係では、学生の納得度はやや低かったと言える。このことは、学生の能動的な学習を引き出す取り組みや、シラバスに記載された「到達目標」に達することができたかといった点では課題が残っていることを示唆している。この点は、過去4期の報告書で、Q9、Q14、Q16の一群で回答平均値が最も低いと指摘した課題が続いていると言える。

特に、「Q16. 「到達目標」（シラバスに記載）に達することができた」については、モードは他の質問と変わらなかったが、4.0以上の高い評価点側の分布が少なく、このことが平均値の低さに繋がったと考えられる。教員が授業計画・実施上で未だ意識する程度が低いことや学生に対する科目の到達目標の説明不足等を反映していると推量され、今後の課題である。

2.2 学生の学習行動

学習行動に関する質問 Q10～Q13、Q15 の結果を、図 4 と表 3 に示す。予習時間の平均は 18 分（17、17、15、17 分）、復習時間は 26 分（24、23、21、22 分）で、多くなかった。

ヒストグラムからも、予習より復習にやや重みが置かれている傾向が看取できる。予習も復習も全く行っていないとの回答が、引き続き多かったが、少数ながら 80 分（90 分）以上の復習を引き出している授業もあった。

授業内外での学習熱心度では、昨期に引き続き、Q13「授業外学習」の自己評価が際立って低かった。Q15「自己の学習態度の総合評価」の平均値は、5 点満点に換算すると、4.0（4.0、3.9、3.9）程度であった。これらのことは、授業外での学習の不活発さをあまり意識していない本学学生の学習意識を示すものと考えられる。モードは 7.5 以上～8.0 未満（8.0 以上～8.5 未満）にあり、昨期から 1 つ階級が落ちていた。

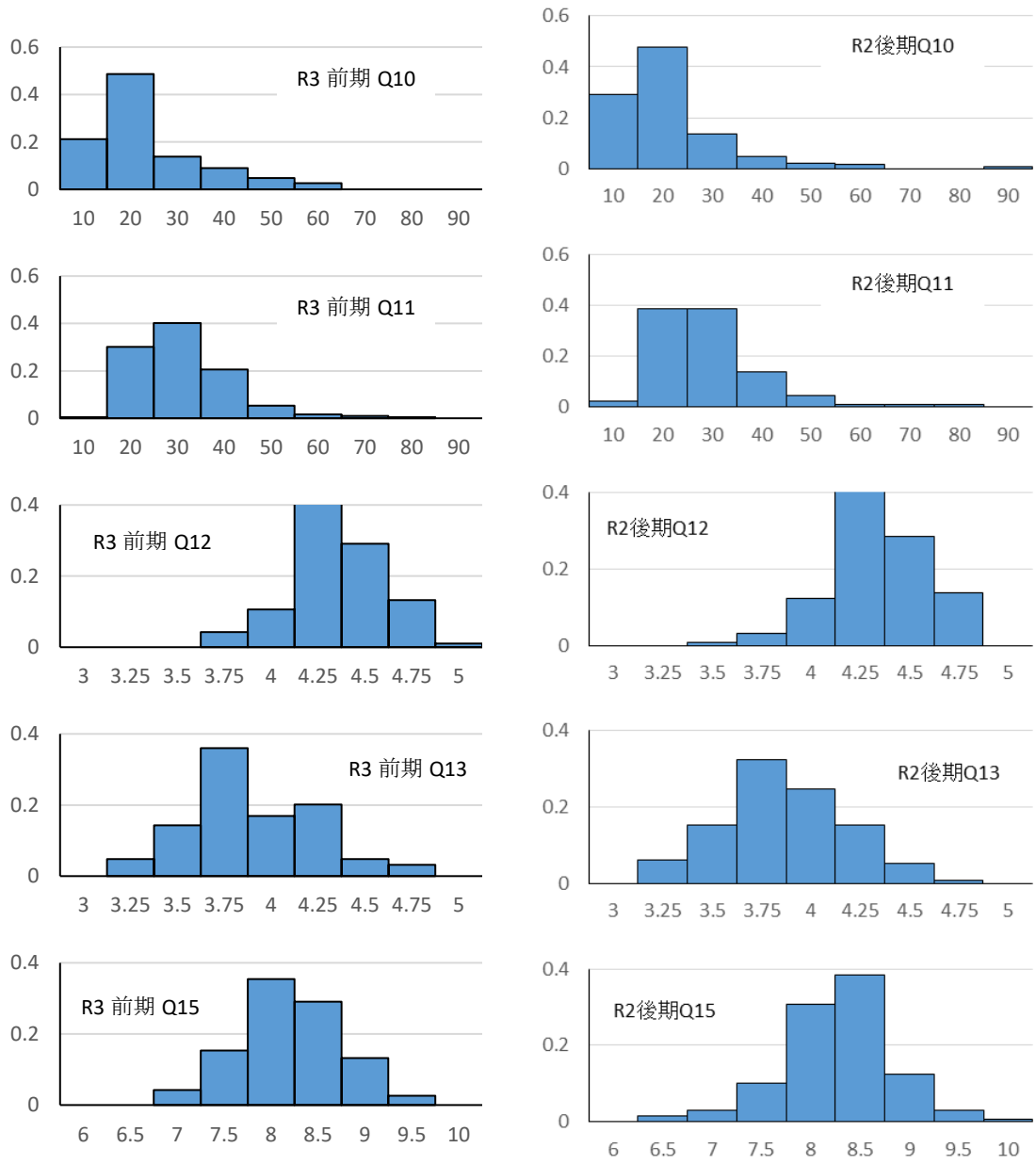


図4 質問項目ごとの回答平均値の分布(Q10～Q13、Q15)：学生の学習行動関係

表3 授業の学習行動に関する質問ごとの結果の平均値と標準偏差等

	Q10	Q11	Q12	Q13	Q15
平均値	18.3	25.6	4.20	3.77	7.92
標準偏差	11.2	10.6	0.24	0.33	0.54
上限値	24.0	30.9	4.32	3.93	8.19
下限値	12.7	20.4	4.08	3.60	7.65

2.3 自由記述

自由記述欄への記載事項を、ポジティブとネガティブな意見に区分して顕著な全体的な傾向の検討は、意見に大きな変化は見られなかったので、今期は割愛した。

3. まとめ

本期の質問項目を、授業のスキル（内容や方法を含む）、アクティブラーニング、教育の質保証関係に分けて分析したのは、3期前から継承したものである。質問項目ごとの評価点の平均値及びその分布から、アクティブラーニングや教育の質保証に関する領域での学生の納得度はやや低いとみられる点は、3期前から変わっていない。

学生の学習態度については、予習・復習に割いている時間や授業外学習への取り組み度からみて、改善はあまり進んでいないと評価できる。もちろんこの改善には、時間を要すると考える。

これらの結果から、本学の授業は実施手法は確実に改善しているが、学生の自主的な学習行動を引き出したり、学習の達成感を感じさせるところまでは至っていないという点は、改善に向けた課題として続いている。

平成29年度の本分析開始以来、質問事項や選択肢に改善を加えてきた。現在の質問は、学生の能動的な学習行動や学修の達成感を問う質問も含まれており、今後暫くは概ね継続したモニタリングに利用できるものと考えられる。ただし、アクティブラーニングの視点をより明確にするために「Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた」は次期調査（令和3年度後期実施分）から「質問や意見を述べる時間が設定されていた」と変更する予定である。